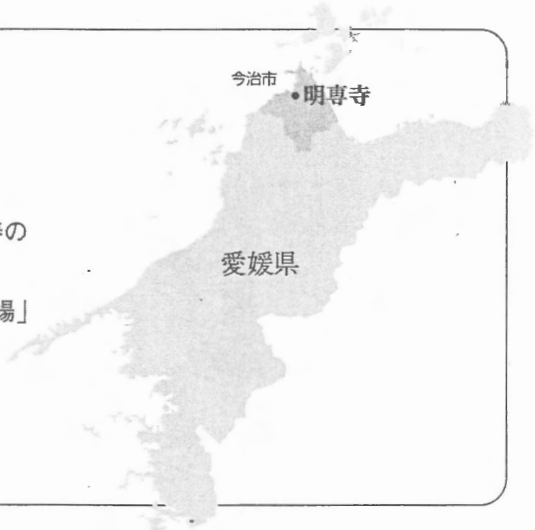
人生の節目節目に

四州教区今治組明専寺



- 初参式・入門式・米寿のつどい
- 「ゆりかご」から「墓場」まで
- 婦人会の援助
- 手間を惜しまず

シリーズ
お寺はかわる
〈最終回〉

人は生まれて成長し、齢を重ねていきます。その人生の節目節目には、さまざまな通過儀礼と呼ばれるものがあります。この通過儀礼をお寺で執り行うことで、その人の人生における仏法とのご縁を深めていこうと工夫をされているお寺があります。

四州教区今治組の明専寺（浅野亨之住職）では、「初参式」、「入門式」、それに「米寿のつどい」を執り行って、人生の節目節目にお寺へお参りできるような工夫がされています。

明専寺の概要

明専寺は愛媛県今治市大西に位置しています。今治市は愛媛県の北東部にある、人口約十七万人の四国で第五の都市です。

港を中心とした商業地として栄え、海運業や造船業をはじめ、特にタオルの生産は全国シェアの六割を占めています。

今治市の人口は、一九七五（昭和五十）年当時、十九万六千人でしたが、少子高齢化が進み、二〇〇五（平成十七）年には十七万三千人となっています。

明専寺のある大西は、以前は越智郡大西町でしたが、二〇〇五年に今治市へ編入されました。今治市の中心街から十キロほど西に離れたところに位置しますが、大西町の人口は、一九七五年の八八二八人から、二〇〇五年の八七〇四人とほぼ横ばい状態です。

明専寺周辺の宗教的環境

明専寺のある大西町には、真言宗の寺院が四カ寺、その他の寺院は真宗、浄土宗、曹洞宗、天台宗系の寺院が一カ寺ずつとなっています。

四国といえば、弘法大師ゆかりの〝八十八ヶ所めぐり〟でよく知られているように、総体的に真言宗の影響が強く、先祖崇拝が重視される傾向があ

るようです。

四州教区は、四国の四県で一教区です。各県によってそれぞれの特徴がありますが、一カ寺あたりの届け出門徒戸数の平均は一五六戸であり、全教区の中で二番目に多い教区です。各寺院によってもちろん違いはありますが、基本的に寺院基盤がしっかりしていると言えそうです。

明専寺外観

明専寺の教化活動

江戸時代初期の開基と伝えられる明専寺では、一九二〇（大正九）年に、仏教婦人会が結成されました。仏教婦人会が各地で結成され始めた、いわゆる萌芽期から現在に至るまで、寺院のさまざまな活動を支えています。

また、日曜学校も昭和の初期から盛んに開催されてきました。先々代の住職の時には、少し離れた波方村の公民館に、分校も設けられていました。

戦後間もないころから、日曜学校の生徒を対象にした、「夏のつどい」も開催されています。この夏のつどいは、お寺に一泊してさまざまな体験をする楽しい会です。月々の日曜学校活動には波もありましたが、夏のつどいは現在に至るまで大にぎわいです。ご門徒以外のお子さんも口コミで多数参加しています。

初参式、入門式、米寿のつどい

明専寺では、「初参式」や「入門式」、また「米寿のつどい」が、行われています。

「初参式」は、『法式規範』に「聞法する人生最初の大切な儀式」[1]と示されており、赤ちゃんが生まれて初めてお参りする儀式です。

明専寺では一九五四（昭和二十四）年から始められ、秋の永代経法要の期間中に執り行われています。そこには毎年欠かさず開催できるような工夫と、初めてお寺に参拝される方への配慮、赤ちゃんとご両親をはじめ家族がお参りしやすいプログラムなど、細やかな配慮が行き届いています。

「入門式」は、『法式規範』に「宗門に帰向し、門徒の本分を守る旨を仏前において宣誓する儀式」[2]と定められた儀式です。しかし、実際にはあまり多くの寺院で執り行われているとは、耳

にしたことがありません。

明専寺では一九五六（昭和三十一）年から、春季彼岸会の法要期間中に執り行われています。主役の子どもたちが自然と入門式を受けるような妙手が施されていました。また、入門式の受式者が成人した折には、本山からの記念品に加え、寺より腕輪念珠を贈り祝っています。

「米寿のつどい」は、本願寺派の儀式として正式に定められているものではありませんが、「本願寺新報」の記事を読んだご住職の発案で、二〇〇三（平成十五）年から、春の永代経法要の期間中に執り行われてきました。今ではすっかり定着し、ご門徒の皆さんに大変喜ばれています。高齢化が進む中で、高齢の方にお参りしていただきやすい配慮がされています。

それぞれの行事を法要の期間中に執り行うことは、赤ちゃんを連れてきた若い親御さんや、入門式を受ける子どもの家族、また米寿のお祝いにお連れした家族などが、自然とお寺で勤まっている法要にお参りするご縁となります。そこには「少しでも仏縁になれば……」という、ご住職の願いがあります。

初参式、入門式、米寿のつどいを法要と併修すると、準備などが大変になりますが、一つの手間を惜しまないところに大きな意味があるのです

初参式の工夫

◉案内の工夫

〈仏教婦人会の援助〉
〈寺報で参加を呼びかけ〉

初参式は、赤ちゃんがお生まれになったご門徒にご案内しなければなりません。しかし、毎年すべてのご門徒宅や、新しく世帯をもたれたご夫婦に赤ちゃんがお生まれになったかどうかを的確に把握することは、困難です。もちろん、ご住職のお声かけが基本ですが、そこは各地区にいらっしゃる仏教婦人会の皆さんの援助が功を奏しています。

各地区で、赤ちゃんがお生まれになったご家庭があると、ご住職にお知らせし、お寺からご案内を届けます。

若いご両親に直接ご案内ができない場合は、祖父母にご案内して、お勧めしてもらうようにお願いをします。仏婦の会員の方々からも、「お寺で初参式というのがあるから受式したらいいよ」と、お声かけをしていただきます。単に、ご案内のチラシをお届けするだけでなく、人と人とのご縁の中で、実際に口コミでお勧めくださるのが、とても効果的です。

◉プログラムの工夫

〈短いプログラム〉
〈ご講師からのお祝いのことば〉

秋の永代経のお朝事のご法座の後、初参式が勤まります。

赤ちゃんを連れた若いお母さんをはじめ、お父さんやおじいさんおばあさんが見守るなか、式は進んでいきます。

赤ちゃんは長い時間とてもジッとしていられません。ですから、なるべく短時間にすませられるような工夫が大切です。

そこで短いお勤めのあと、ご講師によるご法話、記念品の授与、記念撮影という、わずか三十分ほどのプログラムを組んでいます。

初参式の記念撮影

人生の節目を、お寺で迎えていただきたい

〈初参式受式者へのご案内〉
〈仏教婦人会の援助〉
〈継続と総合プロデュースから〉

明専寺の入門式は、小学校入学年次のお子さんを対象としています。『法式規範』では、入門式の対象年齢までは定められていません。

就学年齢のお子さんを対象にしたのは、初参式と同様に人生の節目を、お寺で迎えていただきたいという思いからでしょう。また、ご案内をする時に「入学祝いも兼ねて……」などとお誘いしやすいという利点もあります。

参加者を募る方法は、初参式を受式した赤ちゃんの年齢がわかりますから、そこから計算して就学年齢になったお子さんのお宅にご案内を届けます。

入門式の工夫

◉募集の工夫

〈小学校入学年次を対象に〉

入門式だけでなく初参式も執り行って、人生の節目節目をお寺で迎えられるようにと総合的にプロデュースされていることが、功を奏しています。

一方で、初参式を受式していない人もあるでしょうから、やはり仏婦の役員さんなどからの声かけが大事なのだそうです。

夏休みに、お寺で一泊する「夏のつどい」や日曜学校によって、子どもさんとのご縁があることにより、入門式の受式者も自然と集まりやすくなっています。

入門式を受けた越智武くん（十歳）に、どうして受ける気になったのかと尋ねますと、「お兄ちゃんも受けたから……。お父さんも受けたって」とのこと。五十年を超えて継続されている入門式は、親子二代にわたって受式しているご家族も多いのです。

手間を惜しまず、改善を重ね、いろいろな方の援助をいただいて継続させてきたことが、次の受式者をスムーズに誘っているのです。

入門式での行道

◉入門式の特徴

〈稚児衣装の貸し出し〉
〈受式者による内陣の行道〉
〈ご講師からお祝いの言葉〉
〈受式者の誓いのことば〉
〈入門証の発行〉
〈記念品の贈呈〉
〈家族ごとに記念撮影〉
〈寺報に紹介〉

明専寺では、入門式の受式者が稚児衣装を身につけ、仏教婦人会の方の先導で、お内陣を行道で練り歩きます。稚児衣装はすでに明専寺で購入してありますので、貸衣装の手はずを取らなくて済んでいます。稚児衣装を買い揃えることができるのは、毎年続けて入門式を執り行うからこそできることです。

また細かなことですが、現代の子どもたちは忙しいので、午前中に終了するように工夫されています。朝十時から始まる入門式は、稚児衣装への着替えに二十分、式と記念撮影で三十分で終わるように時間短縮を考慮しているそうです。

就学年齢のお子さんが対象で、時間短縮を考慮しているといっても、単なるイベントに終わらせず、仏法とのご縁となることを願って、ご講師からの

お祝いの言葉もいただきます。

入門式を受式したお子さんたちは代表者が誓いのことばを述べて、全員にご住職から入門証が手渡されます。一九五六年から始まって、二〇〇八年の時点で一一八〇号にまで達しています。

また、入門式を受けたお子さんと親御さんには記念品が渡されます。お子さんには少年連盟で用意されている教材やかわいいグッズ[3]をお渡しし、保護者の方には本願寺出版社から発刊されている仏教書[4]を贈っています。また、今治の辺りではお祝いごとに赤飯を記念に持ち帰ることが多いので、赤飯の用意もしています。

第　号
入門證
右之者浄土真宗
親鸞聖人の教えに
帰依し入門したること
を證します
平成　年　月　日
湯谷山明專寺住職
湯谷山明專寺住職印

入門証

入門式を受けた男の子に、稚児衣装を着た感想を聞くと、「微妙……」とはにかんでいました。現代のお子さんが、稚児衣装を身にまとい、化粧をすることは、まさに非日常のことでインパクトがあったに違いありません。

入門式を執り行うのに、経費もさることながら、参加者を募ったり、準備に追われ、当日の進行にも気を配る必要があります。とても大変なことです。

しかし、この一つでも手間を惜しんでしまうと、入門式を受式するお子さんも激減するでしょうし、式自体を簡略化してしまうと、入門式を受式したことのインパクトがなくなってしまうでしょう。そして毎年継続することができなくってしまうことでしょう。

米寿のつどいの工夫

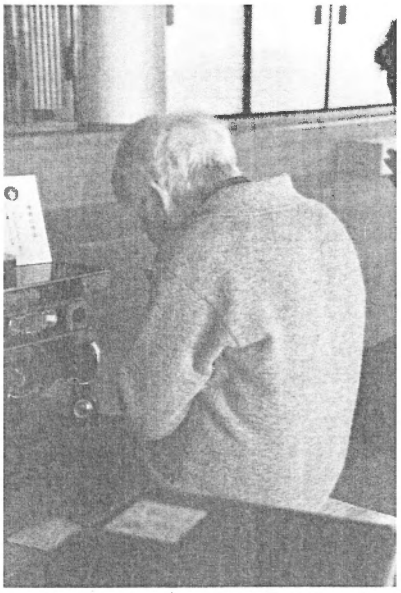
◉プログラムの工夫

〈参拝の皆さんにご紹介する〉
〈健康の秘訣など一言いただく〉
〈短いお勤め〉
〈ご講師からのお祝いの言葉〉
〈記念品の贈呈〉
〈記念撮影〉
〈続いてお斎・永代経法要へ〉

米寿を迎えた方々をお寺にお招きし、ご参拝の皆さんとご一緒にお祝いをさせていただきます。

お朝事がすんだ後、米寿を迎えられた方をご紹介して、一言ずつ「健康の秘訣」などをお話しいただきます。短いお勤めの後、ご講師からご法話をいただき、記念撮影を行います。そのままお斎、永代経の法要へと続いていきます。

毎年記念品もお出しするのですが、



以前境内にあった銀杏の古木で作ったお念珠を記念品とし、好評を得ています。当日、お参りできなかった方にもお渡ししています。

渡部ミネ子さん（九十二歳）は、もとは真言宗でしたが、結婚して明専寺のご門徒となり、仏教婦人会の会長も務められた方です。米寿のつどいでお祝いをうけて、「お寺のおかげで幸せな生活でした。参らせてもらって幸せです」と心より喜んでいらっしゃる声をお聞かせくださいました。また、檜垣紅葉さん（八十八歳）は「初参式、入門式、米寿のつどいと、こんなにしてくれるお寺はほかにないですよ」と喜びの声を聞かせてくださいました。

今までお寺とご縁がなかった方も、米寿のつどいのご案内をいただいて、初めてお寺に参られることもあるとのことでした。

また、たいていの方は家族に送り迎えしていただくので、送り迎えする方もご法縁に遇っていただければと、ご住職は熱い思いを語ってくださいました。

高齢化が進む中で、人生の節目の行事をお寺で行うことは、大きな意味があると言えるでしょう。

核家族化が進み、世代間において、大事なことが継承されにくくなってきています。人生の節目をお寺で迎えることは、お寺の存在やお寺の大切さを次世代に継承してもらう一つのご縁となる、とても大切なことと気づかされました。

まとめ

人生には、さまざまな節目があります。その一つひとつをお寺で迎えることで、一人ひとりの人生における大きな仏縁となることでしょう。

単発的なイベントではなく、継続することがどれほど大切かを知ることができました。また、総合的なプロデュースによって、お互いが関連しあい、お寺とご門徒のつながりが深く保たれていることも重要な要素でしょう。明専寺の活動は、これらの好例ということができるでしょう。

送り迎えする方も
ご法縁に遇っていただければ―

何十年後かに花開くことを願って——

人生の通過儀礼を、一つひとつ丁寧に執り行うことは大変です。しかし、その行事を仏教婦人会の皆さんのお力を借り、手間を惜しまず、お寺の法要において執り行うところに、仏縁となる大きな鍵があったと言えるでしょう。

ご住職と前住職

ご住職は「ゆりかごから墓場までなんて言うでしょう（笑）。手間も時間もかかりますが、一つひとつのことを惜しまずに続けるのは、何十年後かに花開くことを願っているからです」とおっしゃっていました。

そこには、人生の節目節目をお寺で迎え、少しでも仏縁になるようにという熱い思いと、確かな手応えがありました。

（本願寺教学伝道研究所寺院活動研究部会　葛野洋明）

今号をもって「シリーズお寺はかわる」は終了いたしますが、今後も調査は継続して参りますのでよろしくお願いいたします。

1　勤式指導所編集『法式規範（増補版）』二五五頁
2　前掲書　三五〇頁
3　詳細は本願寺派少年連盟のホームページ（http://shonen.hongwanji.or.jp/kyouzai/index.html）をご参照ください。
4　詳細は本願寺出版社のホームページ（http://hongwanji-shuppan.com/）をご参照ください。